KOSUGI＋ANDO　遷移状態@CAS

室井絵里

タイトル「遷移状態」は耳慣れない化学用語である。しかし、漢字の意味を考えれば。ものごとが移っていく時の状態をさすのであろうと察することができる。遷移状態とは、「物質が変化する過程で起こる不安定な状態。安定状態から安定状態へと至途中の過程。一種の高エネルギー状態のこと」をさす。つまり、今の「福島原発」の状態のことを指しているのだなと、最初に考えたが、そこからイメージの連鎖がはじまる。そして、この場合イメージの連鎖の特殊性は、3.11以降マスメディアやあるいはインターネットで日々目にした津波の映像や、原発の様子などと伴って生じて来るということである。

展覧会がはじまった。
実際に会場のドアを明けると、先に入っている人がいなかったら、たった一人で、暗い空間を見ることになる。しかし、薄明かりの中に小さな鉄製のベビーベッドが置かれ、中央にも何か装置めいたものが置かれているのが見えて来る。

ベビーベッドに近づく。
上には、赤ちゃんをあやすベビーサークルが吊られ、それがまわっている。日本地図のようだ。しかし、何かいびつだ。不完全なのだ。。。悪夢に出て来るいびつな形態にも見えて来る。(これは、日本の原発がある場所なのだと後から気がつく。) ベビーベッドは空っぽで「1971~2011」という年号が、生没年をあらわす墓碑のように書かれている。(福島原発の生没年である)

すると、突然、全面にのどかな田園風景が広がる。センサーが反応したらしい。たわわに実った米のたんぼが広がり、遠くに走る車の影、山々。のどかで美しい、見慣れた日本の風景。ラジオの気象通報の声。「アリューシャン列島・・風力3」間延びしたあのラジオのアナウンサーの声って、考えてみればなんだか遠い昔から不変のように感じる。映像に見入っているうちに、その声が突然「福島~~何ミリシーベルト」という無機質な声にすりかわっていく。

日常の気象通報が突然聞き慣れない放射線の測定値を告げ始める。

と同時に、中央の装置が激しい音をたててまわりはじめて、映像が四方の壁に映し出されていく。後ろは、見えないし、うっかりすると、見ている人の影で映像もつぶれる。いや、見ている人の影ごとそこに取り込まれるのか。回転する映像群、一瞬どこを見たらいいのかわからなくなる。クラクラもする。何が映し出されているのか。どうやら、どこにでもある地方都市の人々の暮らしぶり。よく見れば、学校の校庭に積み上げられた土にはブルーシートが被せられ、もしかして、どこか被災地?しかし、それにしては、人々は安穏と日々の営みを生きているようにも見える。

実際は、これは今年の夏から秋にかけての「福島市と近郊」の映像だ。

どこにも、異常が見えない風景なのだが。しかし、何か目に見えない「状態」の変化はあるわけで、むしろその異常さは「福島」だけではなく「東京」にだって「水戸」にだってあるわけだ。いや、遠くたって、日本のどこでもありうる。だから、これを「福島」と限定する必要は無いと気がつく。
人々が普通であるだけに、かえって異常な状態なのだ。

何か絶対的に重要なことを「記憶」にとどめておくべきことを忘れないと人間は生活を続けられない。したがって、記憶からこういう日常風景やあるいは状態そのものが抜け落ちていく。しかし「遷移状態」であることから、「目」をそむけることをさせない装置がこのまさしく「遷移状態」という作品空間なのである。
説明的に「原発」「放射能汚染」のことをとりたてて読み解く必要も無いのかもしれない。もはや「遷移状態」は我々の住む日常であるのだから。しかし、そういういびつな「日常」が生み出されてしまったこと、原発を静かに葬り去り、寝かしつけること、これは今その状態を生きる我々が忘れてはならないことだ。

むごたらしい映像や、TVの画像はそれを消してしまえばあたかも消えてしまうかのようだが。その中に生きている人は、それを消すことができない。見えない放射能は、人々には見えないのでむやみな恐怖を生んだり、逆に根拠の無い楽観論にも走らせる。その構造は、福島から遠くにいても、どこでも起こりうるし、今や地球規模で抱えてしまった見えない脅威なのだ。エネルギー拡大のための戦争と、その戦争ではなく、核の平和利用という名の下に生み出されてきた原発という装置の未来を私たちはどうするべきなのだろうか。

様々な問いかけがこの空間からは響いてくるのである。

中央の装置、何か怒っていたかのようにも聞こえる音をたてつつ、くるくる回転しつつ、今やレトロな雰囲気も持っているスライド映写機は静かに回転を止めていく、壁に映し出された映像も、静かに一枚の映像へと集約して消えていく。
しかし、私たちは「遷移状態」からもはや、目が離せない。
なぜなら、それは、記憶を呼び覚ます装置であるのだから。

2011/10/26